半世紀前からの贈り物

＝今、蘇る「文集」＝

蒲郡市民間大使
内田雅敏プロフィール
蒲郡町生まれ
東京弁護士会所属
著書「乗っ取り弁護士」、「これが犯罪？ビラ配りで逮捕を考える」など多数

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目に飛び込んできました。いろいろなテーマごとに書かれている文集を読み進むうち、自分の書いた文集やその頃の遊びについて書いてある文集に行き当たりました。

小学校の低・中学年のころは、学校の成績など関係がなかった。

そのころは、ソフトボールの得意な子供がクラスの人気者でありリーダーだった。学年が変わりクラス替えがなされるときの最大の関心事は可愛い女の子と一緒のクラスになれるかということでなく、ソフトボールの名手が自分と同じクラスにくるかどうかということであった。かく言う私も6年生のときは、学校を代表するソフトボールのナインの一員であった。

テレビが普及する前のことで野球中継はラジオで聴いた。ラジオの野球中継は終盤いい場面で時間切れとなることが多かった。今思うに翌朝、新聞のスポーツ欄を見れば結果は容易に知ることができたのだが、小学校低学年の子供が朝、学校に行く前に新聞を広げるなどということはもちろんなかった。学校で昨夜の野球の結果が話題になったときMという子供が、延長X回にサヨナラホームランを打たれ中日が負けたと言った。昨晩、兄が中日球場で観てきたという。（Mちゃんの家は名古屋までプロ野球を観に行けるような金持ちなんだ）と驚いたことをよく覚えている。

日本シリーズのような大試合は、大人たちの間に挟まって町の金物店に置いてあったテレビで観た。195X年秋の日本シリーズ、巨人対西鉄ライオンズ戦、3連敗から「神様、仏様、稲尾様」と言われた鉄腕稲尾の力投で〝奇跡〟の4連勝をなし、連覇を遂げた西鉄ライオンズの強さはよく覚えている。その第4戦9回裏、1点リードされていた西鉄が2死ながらランナー2塁、1打同点というチャンス、バッターは関口、固唾を飲んで見守っていた。テレビの画面から「関口、男になれー」という声援が聞こえてきた。関口は粘りに粘ったうえで、よく期待に応えセンター前ヒットし、同点とした。

なるほど「男になる」というのはこういうことなのかと子供心に思った。その後延長戦に入り、稲尾が力投し、最後は自らホームランを打って決着をつけた。伝説の稲尾のソロホームランである。これでシリーズの流れが変わった。

文集の中にはこんな一文もある。

ぼくといぬ

ぼくは犬をつれてタバコをかいにいくと、西のおばさんがえらいといいました。せんろをこえるとき、右と左をよく見てこしました。

田んぼではいねをかっていました。

（J・S男子）

私の家から海まで行くには鉄道の線路を横切らねばならなかったが、当時はまだ遮断機のない踏切も多かった。父母からは遠回りとなっても遮断機のある踏切を渡るように言われていたが守りはしなかった。それどころか、遮断機のない踏切で汽車が走ってくるのを見かけると、その前をギリギリまで待って横切ることができるか競ったことがある。汽車はもちろん蒸気機関車、黒い鉄の塊が煙突から白、黒の煙を吹き上げシュシュポッポと大きな音をたて白い蒸気を吐き汽笛を鳴らしながら走ってくる。あれは間違いなく生き物だった。

（つづく）